

黙示録 9 章 1 節-12 節 スタディーガイド

今回は、黙示録 9 章 1 節から、第一のわざわいである、第五のラッパの災難からです。

黙示録 8 章 13 節で「わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る」と、ここに 3 つのわざわいのことが強調されています。

第一のわざわいは、第五のラッパです。

★ 黙示録 9 章 1 節-3 節

第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。その煙の中から、いなごが地上に出て来た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。

1 節「一つの星が天から地上に落ちるのを見た。」

イエス様がルカの福音書 10 章 18 節で「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました」と言われています。

ゆえに、神学者の中には、地上に落ちてきている星が墮天使であると考え人もいます。中にはサタン自身だと考える神学者もいます。

その星が底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、(シオールやハデスの) 暗闇の所から出ている煙を表しています。

底知れぬ穴＝地球の中心にある空間であると、神学者たちが考えている所です。休む所のない、天井しかない所だと考えられています。

2 節「その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。」

この煙によって、世界が暗闇に襲われています。

ヨエル書 2 章では終わりの日に、いなごの軍勢が悪霊の姿で現れていますが、その成就が黙示録で起こっています。

1874年に昆虫学者が目撃した記録では、いなごの群れが51万平方kmもの広さで現れたと言っています。この面積はカリフォルニア州全域よりも大きく、カリフォルニア州は日本の国土よりも大きいのです。

この記録は、ギネス世界記録にも「生物の作る最も大きな群れ」として掲載され、群れの数は少なくとも12兆5000億匹、推定総重量は2千750万トンとされています。この時のいなごの大群により、太陽の光は完全に遮られたと記されています。

さらに、通常いなごの大群は局地的に現れますが、世界を襲う「大患難時代」では、悪霊の大群が世界規模で現れています。

3節「煙の中から、いなごが地上に出て来た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。」

この大群が、世界中を襲うという第一のわざわいの時です。

★ 黙示録9章4節-5節（口語訳）

彼らは、地の草やすべての青草、またすべての木をそこなってはならないが、額に神の印がない人たちには害を加えてもよいと、言い渡された。彼らは、人間を殺すことはしないで、五か月のあいだ苦しめることだけが許された。彼らの与える苦痛は、人がさそりにさされる時のような苦痛であった。

4節「彼らは、地の草やすべての青草、またすべての木をそこなってはならない」

普通いなごは、地の草やすべての青草、すべての木を食べ尽くしてしましますが、ここでのいなごは、普通のいなごではないことがよく分かります。

4節「額に神の印がない人たちには害を加えてもよいと、言い渡された。」

黙示録7章に書かれている、額に印が押されている14万4千人以外の人々に害を与えることが許されました。

この14万4千人は、伝道のためにしっかり働くことができるように、主が守っておられます。おそらく、伝道をしているほかの信者も守られていることでしょう。

5節「彼らは、人間を殺すことはしないで、五か月のあいだ苦しめることだけが許された。」

この5カ月は永遠に感じるほどの長い時間でしょう。

★ 黙示録 9 章 6 節－10 節（口語訳）

その時には、人々は死を求めても与えられず、死にたいと願っても、死は逃げて行くのである。これらのいなごは、出陣の用意のととのえられた馬によく似ており、その頭には金の冠のようなものをつけ、その顔は人間の顔のようであり、また、そのかみの毛は女のかみのようであり、その歯はししの歯のようであった。また、鉄の胸当のような胸当をつけており、その羽の音は、馬に引かれて戦場に急ぐ多くの戦車の響きのようであった。その上、さそりのような尾と針とを持っている。その尾には、五か月のあいだ人間をそこなう力がある。

6 節「その時には、人々は死を求めても与えられず、死にたいと願っても、死は逃げて行くのである。」

自殺は成功しません。高いビルの上から飛び降りても、骨を折って、なお苦しい思いをするだけで、死ぬことがないのです。

7 節－8 節「これらのいなごは、出陣の用意のととのえられた馬によく似ており、その頭には金の冠のようなものをつけ、その顔は人間の顔のようであり、また、そのかみの毛は女のかみのようであり、その歯はししの歯のようであった。」

人間でないことは確かです。

黙示録 4 章で、天の御使いが動物の顔を持っていました。天の生き物が動物に似ていることは不思議ではありません。

9 節「また、鉄の胸当のような胸当をつけており、その羽の音は、馬に引かれて戦場に急ぐ多くの戦車の響きのようであった。」

悪霊の軍勢は、鉄の胸当てのようなものを着けており、攻撃しても害を加えることができません。

その軍勢は、戦場に急ぐ多くの戦車の響きのようで、人々は恐ろしさのあまり眠ることもできないでしょう。

10 節「その上、さそりのような尾と針とを持っている。その尾には、五か月のあいだ人間をそこなう力がある。」

空を飛びながら、尻尾にある針で人々を指していくと考えられます。

★ 黙示録 9 章 11 節－12 節（口語訳）

彼らは、底知れぬ所の使を王にいただいており、その名をヘブル語でアバドンと言い、ギリシヤ語ではアポルオンと言う。第一のわざわいは、過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。

11 節「彼らは、底知れぬ所の使を王にいただいております」

これについて、神学者がいろいろと語っており、サタンが彼らの王であると理解する神学者もいますが、彼らの王は、底知れぬ所にいる者です。サタンは再臨の後、底知れぬ所に入れられませんので、サタンではないと考えられます。

11 節「その名はヘブル語でアバドンと言い、ギリシヤ語ではアポロンと言う。」

これらは「破壊者」という意味です。ここにしか出てこないことばですから、聖書からそのほかの意味を見つけることができません。

12 節「第一のわざわいは、過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。」

考えられないほどの恐ろしい出来事が、第一のわざわいでした。
この後、なお二つのわざわいが来るのです。

◆MEMO◆



OMEGA MINISTRIES
OMEGA BIBLE STUDY